

# 中学校国語科における言語単元の開発研究

—「方言」を扱う単元の場合—

米田 猛・宮崎 理恵

# 中学校国語科における言語単元の開発研究

## —「方言」を扱う単元の場合—

米田 猛・宮崎 理恵\*

### Research on Linguistic Teaching Unit Design in Junior High School Japanese Language : Instruction in Dialects

Takeshi KOMEDA, Rie MIYAZAKI

#### 摘要

「方言」を扱う「言語単元」の開発と実践を提案する。「言語単元」とは、表現や理解の題材（内容）として、言語を扱ったものを指す。

中学校第2学年国語科で扱う「共通語と方言」について、最近の方言研究の成果を基礎に実践研究を試みている。方言を単に「地域の違いによる差」として捉えるだけでなく、場面や相手による使い分けとしての「社会的な差による違い」と捉える必要性、方言の効果や表現力の豊かさを捉える必要性を学習者に考えさせる実践研究である。

**キーワード**：言語単元，中学校国語科，方言，言語生活，方言詩

**Keywords**：Linguistic Teaching Unit, Junior High School Japanese Language, Dialects, Life with Language, Poems Written in a Dialect

## 1 「言語単元」の意義

「言語単元」とは、国語科の表現指導・理解指導の題材として「言語」を扱った単元のことをいう。類義語に「言語教材」という用語もあるが、「言語教材」という場合、言語現象そのものを指している場合（例えば、看板の文字そのものが文字のことを考える教材である）があったり、教科書等の短い文章で、言語についての知識を獲得させることを目的とするもの（いわゆる「コラム教材」）を指す場合があったりする。

本稿では、ある程度のまとまりをもち（したがって、学習時間もある程度は必要であり）、内容的な価値として言語のことを考えさせると同時に、そこで扱う言語活動により言語能力の育成をも図るという二重構造をもった教材であるという意味で、「言語教材」とは異なる「言語単元」という呼称を使用する。

中学校学習指導要領「国語」に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設されたことに伴い、多くの実践が試行されている。しかし、「伝統的な言語文化」のそれに比べ、「国語の特質に関する事項」のそれは、質・量ともに比べものにならないくらい低調である。原因は様々に推測できるが、根本的な要因は指導者の意識の低さにある。「指導者自身の内容の不理解」「指導の必要性の無自覚」「学習者の興味・関心が低いという指導者の思いこみ」など、指導者の意識改革が喫緊の課題である。

「言語単元」の指導の意義について拙稿（米田 2010）は次のような指摘をした。

- (1) 日本語に関する知識・興味・関心の育成
- (2) 無意識な言語使用の意識化
- (3) 指導者の知識の豊かさや資料準備の容易さ
- (4) 学習者の「言語に対する関心」の高さ
- (5) 生徒の言語経験の日常性

また、「言語単元」指導上の留意点として、次の点を指摘した。

- (1) なるべく学習者の言語生活の中から学習課題や学習資料を提示すること。
- (2) 言語操作（言語処理）のモデルを指導者が示し、学習方法や考察方法を指導すること。
- (3) 結論的に知識をすぐに与えるのではなく、学習者が考えたり調べたりする時間を保障すること。

## 2 「方言観」の変遷

「方言」を授業で取り扱う場合、まずは、「方言」に関する最近の研究成果を日本語学（特に社会言語学）の面から、授業者は確認する必要がある。かつては、「方言」＝「地域の生活言語」という図式があったが、最近の「方言観」には次の3点において、変化が認められる。

- ① 「地域に根ざした生活言語」という従来の「方言観」に加え、職業、年齢等、ある共通の属性を備えた人々のグループで使われる「社会方言」が注目されつつあ

\* 富山大学人間発達科学部附属中学校教諭

る。学生用語、マスコミ用語、官庁用語など、また、幼児語、若者語、老人語などがその例で、「位相」と呼ばれる場合もある。

- ② 石黒圭（2013）は、聞き手に合わせた言葉遣いをみる観点として、

ア 「場面」の「あらたまった」「くだけた」

イ 「話題」の「硬い」「柔らかい」

ウ 「機能」の「丁寧」「ぞんざい」

の3つを指摘した。「方言」使用の傾向についても、この指摘は適用できる。例えば、くだけた場面では「方言」で話している親しい友達でも、あらたまった場面では、その使用は減る傾向がある。あるいは、丁寧に語る場合は「方言」使用は少なく、ぞんざいに語る場合は「方言」使用は多くなる傾向もある。すなわち、同一人物でも状況の差異によって、「方言」使用の実態は異なるのであって、生活語としての「方言」を見る重要な視点となる。

- ③ 「方言観」に大きな変化が認められる。すなわち、

第1期……「方言」は排斥・撲滅すべきもの

第2期……「方言」は保護し、愛すべきもの

を経て、今は、

第3期……「方言」は楽しむもの

という時代となった。マスコミから生まれる「方言」の流行語、方言番付や方言をあしらう土産物、各地の公共施設などに採用される方言をイメージさせる名称などがそれで、田中ゆかり（2011）はそれを「方言コスプレ」と称した。授業で「方言」を扱う際にも、このような楽しむ「方言」の学習や、学習者自身の「方言」に対する意識変化も十分考慮する必要がある。

### 3 「方言単元」の意義

言語単元において「方言」を取り扱うことは、その扱い方はともかく、古くから行われてきたことである。

児童生徒の「方言学習」について、東条操（1973）は次のように述べている。

（前略）自分のもっている方言と比較して、その異同を子細に自分で調べてみることは、①言語研究に興味をもついとぐちになる。（中略）小学生でも、5～6年生なら②採集帳による調査は興味をもって従事するものである。（中略）③最初は若干の単語から入るが、文法や音韻やアクセントも指導しだいでは調べられよう。④個人研究よりはグループ研究のほうが成績があがりやすい。（中略）

⑤中学生以上にねれば、言語地理学的研究に伸ばすこともできるし、または民俗学的研究と関係させて、郷土研究の一環として取り扱うことも可能である。（p.20）

下線部が、「方言学習」の特徴とその意義について述べている部分である。つまり、ここには、

- ① 日常語・生活語である「方言」は、児童生徒が言語に興味をもつきっかけとして、効果のある題材で

ある。

- ② 採集等の具体的な調査活動を通して、言語について学習することは、児童生徒の学習意欲に沿うものである。

- ③ 方言学習の内容は、学習の初期においては「単語や語彙」を扱うのが適切である。しかし、慣れてくれば「語法・文法」「音韻やアクセント」も可能になる。

- ④ 学習形態は、個人学習よりもグループ学習のほうが効果的である。

- ⑤ 中学生以上においては、やや専門的に学習も可能であるし、郷土研究として学習者に対する陶冶的価値も高くなる。

などの「方言学習」の意義が指摘されているわけである。

### 4 単元「方言と私たちの生活」の意義

後述する単元「方言と私たちの生活」の意義について、次の3点が指摘できる。

- (1) 「国語の特質」に関する授業を行うに当たり、単元を開発したこと。

単元や教材の開発はどのような教科、どのような領域でも必要なことである。しかし、実際にはさまざまな理由で開発が行われることは少ない。指導者は教科書に頼り、単元開発の必要性などは感じていないのが実情である。

中学校国語科の場合、「国語の特質」の授業は、多くは短時間（1～2時間）の扱いになる。その場合は、教科書のコラム教材を利用し、学習者には主に知識を教授する授業となる。裏返せば、「国語の特質」を教える本格的な教科書教材は少ないと言わざるを得ない。

本単元では、上述のような指導者の意識の問題、教科書教材の問題に警鐘を鳴らすものである。

- (2) 日本語学における方言研究の成果を取り入れて単元開発を行っていること。

「国語の特質」の指導に関わる課題として学会等で論議されていることに「国語科教育学と日本語学との連携」がある。「連携」の視点は多様であるが、何よりも「連携」すべきは、日本語学の研究成果を国語科教育学がどう取り込み、教育の問題として昇華させるかという点にある。

本単元では、次のような方言研究の成果を取り入れて開発を試みている。

- ① 方言を「地域差による言語の異なり」という観点だけで捉えず、「場面や相手の差による言語の異なり」という観点も加えている。これは、方言を「生活言語」とするときの重要な視点である。

- ② 方言の豊かな表現力や微妙なニュアンスを楽しむ学習を取り入れている。それは「方言詩の創作」という表現学習として、学習者自身の表現力に寄与する学習でもあり、方言を学習者自身が意識し、

見直す学習でもある。

- ③ 方言の果たす役割を「効果」という視点で学習者に考えさせている。それは、学習者がポスターや標語に使用されている方言を収集し、その効果を考える学習として具現化されている。
- (3) 学習者の生活の中の言語が学習の材料となって、言語を意識的にみる学習としたこと。

方言が「生活の中の言語」であるから、学習者の生活の中の言語が学習対象になるのは当然である。しかし、「国語の特質」の学習を構想するとき、あるいは、言語単元の開発をするとき、ややもすると、知識の獲得の学習に陥りがちである。

学習者の生活の中の言語を学習材料にすることが、言語単元の開発の場合、必須であるし、そのための指導者の資料収集と学習者への学習材料提供が適切になされている点は、今後の言語単元開発のモデルとなる。

## 5 単元「方言と私たちの生活」の開発

### (1) 単元開発のねらい

平成20年版中学校学習指導要領（国語）では、第2学年（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）(1)「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」に、「(ア) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。」が挙げられている。ここでは、生徒一人一人が日々の言語生活や言語活動を振り返り、言葉の法則性や言葉の果たす役割というものに気づき、理解し、自らの言語生活をより豊かにしていくために必要な学習が示されている。

方言に対する生徒のとらえ方は、「関西弁」をはじめとしたテレビや書籍でよく目にするもの、祖父母が話しているもの、などという他人事のとらえ方が多く、自らの言語生活における方言については、無意識である。その結果「方言は温かくて味わいのあるものだ」という一般的な解釈で終わってしまい、学習指導要領のいうところの「共通語と方言の果たす役割」まで迫ることができない。

そこで、方言を身近なものとして考え、多面的に共通語と方言について考えられるような単元を構成することを試みることとなった。

まず、生徒全員（富山大学人間発達科学部附属中学校第2学年4学級、各学級40名計160名）に対して意識調査を行った。調査項目は次のとおりである。

- 1 「方言」と聞いてイメージすることを自由に書いてください。
- 2 あなたは富山弁をどの程度使っていますか。  
よく使う    まあまあ    あまり    使わない
- 3 よく使うと思う富山弁を書いてください。
- 4 あなたは富山弁が好きですか。  
とても好き                      まあまあ好き  
あまり好きでない              嫌い

5 4の理由を教えてください。

6 あなたは富山弁を恥ずかしいと思いますか。

※現在住んでいる市町村

※他の都道府県に住んでいた場合の都道府県名

附属中学校の生徒には、言語獲得期に他県にいた者、家族が他県出身者である者がいる。また、県内全域が通学圏である。したがって、「他県在住歴」「現住所」も調査に加えた。

項目2, 4, 6はNHK放送文化研究所「現代の県民気質—全国県民意識調査」(1996)の個人面接調査の項目を参考にしている。このNHK調査では、富山県は「方言が好きではない」「方言は恥ずかしい」という傾向がある。この2, 4, 6について結果は次のとおりとなった。

2 あなたは富山弁をどの程度使っていますか。

とても・まあまあ……66%

あまり・まったく……34%

4 あなたは富山弁が好きですか。

とても・まあまあ……61%

あまり・まったく……39%

6 あなたは富山弁を恥ずかしいと思いますか。

とても・まあまあ……28%

あまり・まったく……72%

また、5の項目において、方言が好きな理由としては、「身近に感じるから」「いつも使っているから」が挙げられ、嫌いな理由として「他県の人に通じないから」「田舎くさいから」「古くさいから」が挙げられている。

その他、「富山県以外に住んでいたことがありますか」「富山県以外に親戚はいますか」という項目では、ほとんどの生徒がどちらかにあてはまり、富山弁以外の方言を話す人と関わりがあることが分かった。なかには、「富山に来たときに富山弁が分からず、方言そのものが嫌いになった」「親戚から富山弁を指摘され、恥ずかしくなった」という生徒もいた。

調査結果をみると、34%の生徒が方言を「あまり」「まったく」使っていないと回答しており、「何が富山弁かよく分からない」という生徒もいた。おそらく方言があまりにも日常的であるため、意識できないのであろう。しかし、実際には発音に関すること（アクセントやイントネーション、語尾のゆれ）、語彙に関すること（富山県以外では使用しない語）など、方言を使っていない生徒はほとんどいない。まずは自分の言語生活を振り返り、相手や場面によって言葉を使い分けていることを自覚させることが必要である。

一方、方言が地域の文化に根付いてきた言葉であり、表現の可能性を広げてくれるものであることに気づかせ、方言のよさや豊かさを実感させるような単元を構成していくことも必要である。その際もやはり方言を単に「よいもの」として扱うのではなく、相手や場面によって使い分ける必要があるものだという側面も理解させたい。

そこで、次のようなねらいを設定して単元開発に取り組んだ。

① 生徒が言語生活を振り返り、方言に対する意識を高めるための教材の工夫

② 生徒が主体的に表現する言語活動の工夫

## (2) 実践の概要

### ① 授業実践

ア 対象 富山大学人間発達科学部附属中学校  
第2学年 160名(全4学級)

イ 実施期間 2011年10月～11月

ウ 単元名 方言と私たちの生活

### ② 単元の目標

方言のよさを実感し、方言と共通語の果たす役割を考え、言語生活の向上に生かす。

### ③ 単元の全体計画(全5時間)

第1次 「話し言葉」を見直し、場面や相手によってどのような違いがあるか話し合う。…1時間

第2次 身近な方言である「富山弁」について考え、話し合う。…2時間

第3次 「方言詩」の創作と鑑賞。……2時間

## (3) 授業の実際

### ① 第1時：話し言葉を見直そう

「友達と話をしよう」「先生と話をしよう」「全校生徒の前で話をしよう」という3つの場面を想定しながら、「富山の観光地」をテーマにペアで会話をさせた。

自然な会話をしているペアを2～3組指名し、全体の前で発表させた。その後、3つの場面における違いを話し合わせた。相手による違いを意識させるために「友達」と「先生」との違いを比べさせ、場面による違いを意識させるために「くだけた場面」と「改まった場面」との違いを比べさせた。

話し合いでは、相手や場面によって言葉遣いや話し方が違うことに気付くことができた。これまで意識しなかった自分の言語生活を改めて振り返り、使っている言葉を客観的にとらえることで、よりよい言葉を使おうという姿勢につなげる第一歩として、多くの生徒が無意識に使っている方言について意識させることができた。

本時における生徒の反応の一部は、次のとおりである。

#### ア 相手による違いについて

##### 【友達と話す場合】

- 方言を使っている。
- 語尾がやわらかくなっている(例：～だよ)
- 助詞などの省略がある。

##### 【先生と話す場合】

- 共通語を使っている。
- 自分がへりくだって謙譲語を使っている。
- 文章語を使うことが多い。

○主述を整えている。

#### イ 場面による違いについて

##### 【くだけた場面】

- 方言を使っている。
- 語尾が丁寧でない。

##### 【改まった場面】

- 共通語を使っている。
- 文章語を使うことが多い。
- 敬語を使っている。
- 分かりやすい言葉を使っている。

### ② 第2時：身近な方言「富山弁」について考えよう

方言から得られるイメージをふくらませ、豊かな言語感覚を身に付けさせたいという指導目標を達成するため、身近な方言である富山弁を取り上げ、共通語と比べながら印象を話し合わせた。また、ここでは方言がその土地に根付くには理由があるということや言葉の移り変わりについても触れた。

具体的には、次に示す活動1～3を行った。

【活動1】知っている富山弁を「使うもの」と「使わないもの」とに分けて書き出そう。

2～3語しか書けない生徒から10語以上書ける生徒までさまざまであった。全体で出し合うと、「まいどはや(こんにちは)」「きのどくな(ありがとう)」など語彙のレベルでは「知っているけれど使わないもの」が多く、それに対して「知らん」「いっちゃ」のように語尾を変化させた語法・文法のレベルでは富山弁を使っていることが分かった。

知らない富山弁は「富山県方言番付表」を用いて確認することとした。「富山県方言番付表」には生徒が大変興味を示したので、休み時間などに貸し出し、自分が知っている富山弁はどこに書いてあるか探したり、初めて知る富山弁に驚いたりするなど、富山弁に対する関心を高めていた。また、「かたがる(傾く)」「がんび(模造紙)」など、日常あたりまえのように使っている言葉が共通語ではないことに気づき、方言と共通語との関係について、新たな認識を得ることとなった。

「方言を使っていない」と思い込んでいた生徒も自分の言語生活を振り返り、方言を使っていることを自覚したようであった。

生徒が集めた「富山弁」は次のとおりである。

#### ア 生活の中で使っている富山弁

- ～け?、～ん?、～しられ、～がけ、～やぜ
- くどい、こわくさい、しょわしない、だやい、はがやしい、やこい、いじくらしい
- 一題め(歌詞の一番のこと)、校下、内履き、だやか
- つばいそ、ふくらぎ、がんど、がんび

#### イ 生活の中で使っていない富山弁



- ～まいけ、～やちゃ、たっしゃけ
- まいどはや、きときと、うしなかず、わびらしい、しょんどる
- はんどろし、らふらんす、こけ（きのこ）

【活動2】 富山弁と共通語とを比較し、与える印象について考えよう。

ワークシートにある「おばあちゃんと孫」の会話を声に出して読ませた。方言は話し言葉であるため、声に出してみることでアクセントやイントネーションの違いが意識できた。会話のキーワードとなっている富山弁を取り上げ、共通語に置き換えるとしたらどのような言葉を使うか考えさせた後、自分の言語生活と重ねながら、それぞれの言葉のイメージを話し合わせた。

まずは、方言「きときと」を共通語「新鮮な」「ぴちぴち」「活がいい」「元気な」と置き換えた。「きときと」はこれらの意味を全て含んでおり、どの共通語で表すよりも意味が伝わってくるという意見にまとまった。

それに対して、「なーん」「きのどくな」は意見が分かれた。方言「なーん」を共通語「いいえ」「いいえ」「違います」「ううん」と置き換えた。「なーん」の方が、相手を傷つけない「優しい感じがする」という意見が多い一方、「否定するときは『いいえ』と言ったほうがはっきりする」「『なーん』は目上の人を使うにはふさわしくない」という意見も挙げられた。

次に方言「きのどくな」を共通語「ありがとう」「わざわざすまないね」「感謝しています」「ごめんなさい」と置き換えた。「おばあちゃんに言われると、ほっとする言葉である」「相手を敬う気持ちが強い」という意見が挙げられたが、「かわいそうと思われる感じがする」という意見も挙げられた。

富山弁と共通語からそれぞれの言葉に合う日常の場面を思い浮かべたり、一つ一つの表現にこだわりながら考えていたりなど、生徒が自分のもっている言語感覚を生かしながら話し合うことができた。「それぞれふさわしい場面がある」という前時の学習をふまえた意見も多く見受けられた。

#### 【ワークシート例】

太郎 おばあちゃん、こんにちは。  
 花子 おばあちゃん、久しぶりやね。これおみやげ。  
 おばあちゃん（ ），いつももろてばかりでねえ。  
 太郎も来たがけ。挨拶もしっかりできるし、なんちゅ（ ）子け。  
 花子 （ ），そんなことないちゃ。太郎いつも（ ）なことばかりしとるよ。  
 太郎 姉ちゃん、嫌なことばかり言ってくるから、ほんと（ ）わ。  
 おばあちゃん けんかしられんな。今朝お隣さんか

ら（ ）の魚もらったから、一緒に食べんまいけ。

#### 【生徒の感想例】

富山弁と共通語を比べてみて、富山弁は一つの言葉にたくさんの意味があって、一つの言葉でたくさんの気持ちが伝わるのはいい。気持ちが込められている感じだから、富山の人の温かさが伝わると思った。でも、ちょっと共通語とは違うので、場面に合わせてうまく使い分けていきたいと思う。でも、思いやりのこもった富山弁を大切にしたい。

【活動3】 富山弁が親しまれている理由を考えよう。

「きのどくな」「きときと」が、なぜ富山弁として親しまれてきたのかを考えさせた。「きのどくな」には富山県民の気遣いや謙虚さが伝わるという意見や「きときと」など魚に関する方言が多いのは漁業が盛んだからであるという意見が挙げられた。

さらに、使わなくなった富山弁は生活の移り変わりが原因であると考えたり、古典で学習した古語が富山弁で使われている意味と同じであることに興味を示したりするなど、言葉に関心をもつよい機会となった。

方言の学習を通して、言葉がもつ意味や語源など自分たちが使っている言葉を知ろうとすることで、言葉を大切にしていこう姿勢を身に付けることにつながるのではないかと考える。

次に示すのは、ある生徒の記述例である。

【富山弁】……言いやすい。親しみを感じる。生き生きしている。富山らしさがある。いろいろな意味が込められている（例：きのどくに……「自分のためにわざわざ」という気持ちがこもる）。

【共通語】……分かりやすい。意味が伝わりやすい。簡単に言える。堅苦しい。

#### ③ 第3時：身近な方言「富山弁」を集めよう

前時に引き続き、方言が与える印象について考えを深めるため、富山弁を使った広告や商品などを集めさせ、方言を使うことによって生まれる効果について話し合った。

【活動1】 富山弁を使うことでどのような効果があるか考えよう。

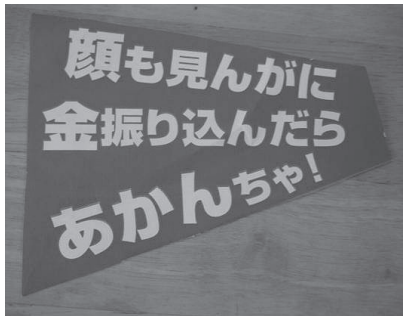
生活で方言が使われていることについて、「富山の人にとっては親しみやすい」「身近な人に呼びかけられている気がする」「富山特有という感じがする」「富山の人しか分からないというのが、特別感を生んでいる」「見つけたら楽しいし、嬉しい」という意見が挙げられた。

次の写真は、ポスターや商品に富山弁が効果的に使用されている例を、生徒自身が集めたものである。

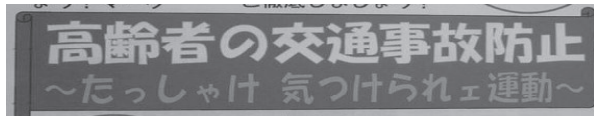
このような活動を通し、また、前時の方言について理解を深めたことを生かしながら、与える印象を考えたり、方言を楽しんだりすることで、方言のよさや効果を実感できたようである。その一部を示す。

- お年寄りに呼びかけるときは、方言のほうが身近で分かりやすい。(写真①②)
- 富山の人が愛着を持って利用できるような効果をねらっている。(写真③)
- 他県に富山をアピールできたり、方言を使用することで、生き生きとした感じや、どこことなく懐かしい感じを醸し出すことができる。(写真④⑤)

写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



【活動2】 方言のよいところと方言を使うときに配慮が必要なところをまとめよう。

これまでの学習を振り返り、方言のよいところと使うときに配慮が必要なところをまとめた。これは「方言はよいものだからどんどん使おう」という単純な考えで終わらないことを目的としている。

中学校学習指導要領（国語）〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕（1）「イ言葉の特徴やきまりに関する事項」「（ア）話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。」とあるように、共通語と方言のそれぞれのよさを生かしながら、相手や場面に合った言葉の使い分けができるようになることをねらった。

授業の後半では方言のよいところを共通理解し、方言詩を創作するという次時につなげた。

次に示すのは、生徒の意見の一例である。

#### 【方言のよいところ】

- 地域で使うと親しみやすく、安心感がある。
- 日常会話では使いやすい。
- 共通語では表せないいろいろな意味やニュアンスが表せる。
- 他地域の人には、その地域に興味をもってもらったり、理解してもらったりするきっかけとなる。

#### 【方言を使うときに配慮するところ】

- 公の場で使うことは避ける。
- 他の地域では伝わりにくいので、使わない。
- 相手によっては、よそ者扱いされた感じを受ける。

#### ④ 第4時：方言詩を創作しよう

ここでは、浜本純逸編（2005）と島田陽子・畑中圭一（1980）を参考にした。これまで学習してきた方言の豊かさやおもしろさを生かし、詩を創作する学習活動である。

【活動1】 方言詩のよさを味わおう。

創作活動の前に、いくつかの方言詩を紹介した。『大阪弁のうた二人集 ほんまにほんま』にある「えらいこっちゃ」という詩を取り上げ、よさを話し合わせた。しかし、授業者である筆者（宮崎）自身が正確に音読したり、話者にしか分からない微妙な気持ちまでを解説したりすることは難しかった。そこで、実際に関西弁を話すゲストティーチャー（米田）が「えらいこっちゃ」の音読と解説をした。生徒は自分たちとは違う方言に興味を示し、「えらいこっちゃ」の言葉にうれしさが表現されているなどの解説に聞き入っていた。次に示すのはその詩である。

えらいこっちゃ 畑中 圭一

えらいこっちゃ えらいこっちゃ  
 ぼくの絵が はられたでえ  
 大根いっぽん かいただけやのに  
 先生 まちごうたんと ちゃうかな  
 えらいこっちゃでえ  
 えらいこっちゃ えらいこっちゃ  
 たんじょう日に よばれたでえ  
 転校生の まちこちゃんにやで  
 あの子 まちごうたんと ちゃうかな  
 えらいこっちゃでえ

【活動1】 方言詩を創作しよう。

これまでに学習したワークシートや「富山県方言番付表」を見たり、声に出したりしながら創作に取り組むこととした。普段使っている富山弁を取り入れたり、富山弁と共通語の意味の違いから生まれた勘違いをテーマにしたり、言葉にこだわりながら創作する姿が見られた。

次に示すのは生徒作品の一部である。

【作品1】 きときと

富山の方言「きときと」聞けば  
 みんなきと、富山が好きになる  
 富山の方言「きときと」聞けば  
 みんな富山にきと一なる  
 みんな来ればきと  
 富山はもっときときとになるだろう

【作品2】 みんな優しいがいちゃ

「何 食べっけ？」  
 きときとの白えび、ぶり、ほたるいか  
 「これあげっちゃ。」  
 おばちゃん特製はんごろし  
 「一緒に食べんまいけ。」  
 富山のみんなの、温かい笑顔

【作品3】

「いとしーねえ」とおばあちゃんが言う。  
 「いとしーねえ」とニュースを見ながら  
 かわいそうという意味だけど、  
 もっと大きなやさしさを感じる。

【作品4】

「来（こ）ればいいが？」  
 「来（く）ればいいの？」  
 富山弁で  
 変わっちゃ  
 「カ変」

⑤ 第5時：方言詩を鑑賞しよう

付箋を用いて、感想を交流した。詩の創作は言葉の吟味を必要とする。これまでの学習で関心を高め、方言のよさやおもしろさを実感できたからこそ、創作したり友達が作った詩を味わったりすることができた。実際に方言詩を創作して楽しむことが表現の

工夫につながったり、自分の思いを率直に表現したりすることにつながった。

次に示すのは、生徒が創作した詩と感想の例である。

【詩1】理由

「元気にしとるが？」  
 たまには富山に帰ってこられ」  
 少ない言葉でも  
 富山弁が迎え入れてくれるが  
 聞くと帰ってきやすいが  
 あったかいが  
 だから  
 みんなに愛されとるん  
 富山弁は

【感想1】

- ・富山弁のよさを詩に表しています。
- ・富山弁の温かさが伝わってきた。
- ・とても分かりやすい詩です。
- ・富山弁が皆に愛されている最後の1行がいいです。
- ・これを読んで私も温かくなったが。

【詩2】富山大好きなん

「私富山キライなが」  
 「なんで？」  
 「富山弁なんで田舎くさいやん」  
 ある女の子の対話  
 富山を嫌いと言っとるけど  
 富山弁を使っとるちが  
 富山県民は  
 富山が好きなん

【感想2】

- ・ほのぼのしていてかわいらしくていいです。
- ・会話を使っているところがおもしろいです。
- ・富山県民は素直に言えないけど、富山を好きだというのが自然に伝わった。
- ・対話が入っていておもしろかった。
- ・ユーモアがあります。
- ・嫌いと言いつつ実は好きっていうのがいいなと思います。

【詩3】ありがた一なる

ごはん食べた後  
 ありがた一なる  
 風呂はいったときも  
 ありがた一なる  
 布団はいったときも  
 ありがた一なる  
 一日一日  
 ありがた一なる

【感想3】

- ・反復法を用いているところがいいですね。
- ・共感できます。



- ・反復法を使っていて、ありがたさが伝わってきます。
- ・温かい感じでいいと思いました。
- ・リズム感がいいね。
- ・反復法と富山らしい雰囲気がいいなと思います。

## 5 単元を終えた生徒の変容

学習後に第2学年の生徒全員(4学級各40名計160名)に対して意識調査を行った。事前の意識調査の「方言を使いますか」「方言は好きですか」「方言を恥ずかしいと思いますか」という項目を残して次のようにした。

- 方言の授業を終えてどうでしたか。  
楽しかった                      まあまあ楽しかった  
あまり楽しくなかった      楽しくなかった
- 理由を具体的に書きましょう。(「～の活動が…だった」など)
- 授業をとおして、「方言」に対する考えを深めたり広めたりできましたか。  
できた                          まあまあできた  
あまりできなかった      できなかった
- 理由を具体的に書きましょう。(「～の活動で…を学んだ」など)
- あなたは富山弁をどの程度使っていると思いますか。  
よく使う                      まあまあ使う  
あまり使わない              使わない
- あなたは富山弁が好きですか。  
とても好き                      まあまあ好き  
あまり好きでない          嫌い
- あなたは富山弁を恥ずかしいと思いますか。  
とても思う                      まあまあ思う  
あまり思わない              思わない
- その他、方言や方言の授業について意見があれば書いてください。

結果は以下のとおりである。

- 5, 7については大きな変化が見られなかった。
- 6については、「とても好き」「まあまあ好き」が、授業前の61%から81%に大幅な増加が見られた。
- 新しい項目である1, 3については、
  - 「1 方言の授業は楽しかったですか」について「楽しかった」「まあまあ楽しかった」が92%,「あまり楽しくなかった」「楽しくなかった」が8%であった。
  - 「3 授業をとおして、方言に対する考えを深めたり広めたりできましたか。」について「できた」「まあまあできた」が95%,「あまりできなかった」「できなかった」が5%であった。
- 8の自由記述の結果を次に示す。
  - 「古くさい」とか「ださい」とか思っていた言葉も今回のように、由来を調べ、私たちの生活とのか

かわりを知ることで一つの大切な言葉なのだと実感することができました。言葉というものはどれも必要だったから生まれて残ってきたのだと知ること、親近感がわきました。

- 僕はこの学習をする前までは何が富山弁で何が共通語かを分かっていませんでした。それはなぜか考えてみると、いつも自分が使っている「ことば」が自分の周りで共通に理解できているからだと思います。
- 私は小さい頃「富山弁はお年寄りの言葉だから、使いたくない」と思っていたが、今は実際に使っている。やはり富山で育ち、その温かさに触れてきたからだろう。普段、身近すぎてあまり深く考える機会もない富山弁だが、改めて考えてみると長所も短所もあり、使い分けていることも分かった。
- 方言の学習をする前は、「富山弁ってなんかおばあちゃんばいし、あんまり使いたくない」と思っていたが、追究してみても富山弁の温かさを感じた。身近には富山弁を使った商品やキャッチコピーがあって、地域への愛を感じた。でも、富山弁はすべての人に親しまれるというわけでないので、時と場合、相手や場所などを考えて使っていきたい。
- 今回の学習をして、言葉は毎日ずっと使っているもので、方言と自分は切っても切れないものであることが分かった。これからも富山弁を使いながら独特な表現や富山県民にしか分からない言葉があるということに誇りをもちたい。

これらの感想には、無意識に使っていた方言を意識できたというもの、否定的に捉えていたが肯定的に考えるようになったというもの、方言のよさを感じたというものが中心だった。中には、言葉の使い分けについて考えを深めたものや方言を地域のPR手段について考えたものなどが見られた。

## 6 考察

- 生徒が言語生活を振り返り、方言に対する意識を高めるための教材の工夫について
  - 自分や友達の話し言葉  
自分の話し言葉をもとにその特徴について考えたり、共通語と比較したりしたことは、単なる方言に対する知識・理解に終わることなく、生徒自身が自らの言語感覚を確かめることとなり、学習意欲を高める意味で効果的であった。
  - 富山弁を使った広告や商品  
方言について考えさせるときに、生徒が実際に使っているものや生活の中で目にするものを取り上げたことで、生徒が自分の問題としてとらえていた。そのことが活動や話し合いに意欲的に取り組むことにつながった。  
また、方言を守ろうという流れや方言を一つの

地元の象徴として商品化するという流れなどの新しい方言の役割に気付くことにつながった。普段の会話だけでなく意図的に方言を使うことにどのような効果があるのか考えることができた。

### ③ 方言詩

方言詩を書くという表現活動をさせるときに、例として大阪弁の詩を取り上げ、ゲストティーチャーが、音読と解説をした。そのことが方言詩への関心を高めた。これまでの方言の学習をもとに、自分も詩で表現することに挑戦したいという意欲につながった。

## (2) 生徒が主体的に表現する言語活動の工夫

### ① 方言詩の創作

単元の最後に方言詩の創作を行ったことは、これまで考えたり話し合ったりしながら身に付けた言葉にこだわる姿勢や実感した方言のよさを実際に表現することにつながり、生徒の力となった。

## (3) 課題

### ① 話し言葉の使い分けに関する観点

話し言葉の振り返りでは敬語や若者言葉への気づきがある。この実践では方言について取り上げたが、他の事項についても生徒の興味が高まったときに扱うことは効果的だと考える。関連を図った指導を考えていきたい。

また、第1時では「友達」「先生」という相手の違いと、「くだけた場面」「改まった場面」という場面の違いのみで比較を行った。しかし、言葉を適切に表現するためには、「何のために」話しているかという目的などの観点も必要であった。

### ② 音声言語である方言

今回の実践研究では、語彙や語尾の取り扱いが中心となってしまった。音声言語は記録がしにくいので、取り扱いが難しいが、方言は音声言語である。その特徴を扱う時間が不足していた。

### ③ 伝統的な言語文化としての方言

方言の学習においては、単に単語一つ一つのおもしろさに触れるだけで終わることなく、その言葉を縦（歴史）のつながりと横（生活圏）のつな

がりで見えていくことも大切である。方言の語源や古語との結び付きに着目した教材も考えていきたい。

## 文献

- ・石黒圭（2013）『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』光文社
- ・井上史雄（2007）『変わる方言 動く標準語』ちくま書房
- ・加藤和夫監修（2008）『がんばりまっし金沢ことば』北國新聞社
- ・河野庸介編著（2008）『中学校新学習指導要領の展開』明治図書
- ・米田猛（2010）『『言語単元』の可能性』日本国語教育学会『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造 VI 中学校編』東洋館出版社
- ・佐藤亮一編（2009）『都道府県別全国方言辞典』三省堂
- ・真田信治（2001）『方言は絶滅するのか』PHP
- ・真田信治（2002）『方言の日本地図 ことばの旅』講談社
- ・島田陽子 畑中圭一（1980）『大阪弁のうた二人集 ほんまにほんま』サンリード
- ・田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
- ・東条操（1973）『方言と国語教育』文化庁『覆刻国語シリーズIV 標準語と方言』教育出版
- ・浜本純逸編（2005）『けっぱれ、ちゅら日本語 現代若者方言詩集』大修館書店
- ・簗島良二（1992）『おらっちゃらっちゃの富山弁』北日本新聞社
- ・簗島良二（1994）『富山弁またい抄』北日本新聞社
- ・簗島良二（2001）『日本のまんなか富山弁』北日本新聞社

（2013年8月9日受付）

（2013年10月9日受理）

